

○山崎 晶¹

¹九大生体防御医学研

結核菌は宿主の細胞性免疫を強く活性化することが知られている。強力な細胞内寄生菌に対抗するために宿主が進化上獲得してきた生存戦略であると考えられる。この強力な作用を免疫賦活に利用する試みは古くから行われており、結核死菌を主成分とする完全フロイントアジュバント（CFA）は広く知られるところである。結核死菌中には、コードファクターと呼ばれる強い免疫賦活作用を有する脂質成分が存在することが知られていたが、後にこの成分はトレハロースジミコール酸（trehalose-6,6'-dimycolate; TDM）という糖脂質と同一であることが判明した。実際、TDM、並びにその合成誘導体は様々な免疫応答を強く惹起し、アジュバントとしても用いられているが、その作用を担う宿主側の受容体は半世紀以上不明であった。

近年我々は、Mincle（macrophage inducible C-type lectin）と呼ばれるCタイプレクチンレセプターがTDMを認識し、自然/獲得免疫を惹起する活性化受容体であることを見出した。また、MincleはTDM以外にも様々な病原体由来リガンド（PAMPs; pathogen-associated molecular patterns）を認識すること、損傷自己由来のリガンド（DAMPs; damage-associated molecular patterns）を認識することが判明した。本シンポジウムでは、Mincleによる自己、非自己双方に起因する生体の「危機」の感知と、その意義に関して議論したい。